



相談支援つうしん

県立湘南支援学校
支援連携グループ
相談支援班 第8号
令和6年1月19日(金)

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。しかしながら年明けと同時に、大きな災害や事故の発生に驚きを隠せません。被災された方やご家族の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。TV等の映像を見て、不安を抱くお子さんもいるかと思えます。ユニセフ等から災害時の子どものケアの方法について「安心感を与える」「被災地の映像を繰り返し見せない」といったアドバイスが上がっていますので、ご確認くださいと思います。

さて、今回は、2月に行われる研修会の情報提供を二つさせていただきます。

① 第36回日本ダウン症療育研究会のご案内 2024.2.17(土) 長崎大学医学部

*詳細⇒ https://plaza.umin.ac.jp/~JSCRD/activities-technical_meeting_held.html

アプリ peatix サイトより (<https://jscrd-36.peatix.com>) に申し込み方法公開。

チケット 2/15 締め切り (非会員 2000 円) より申し込み、アーカイブ配信あり。

【内容】 教育講演 ダウン症候群の精神的問題と対策 今村 明 (長崎大学生命医科学域保健学系)

一般演題 1) ダウン症者のための認知評価尺度 (日本語版 CS-DS) の対象拡大のための検討

森藤香奈子 (長崎大学生命医科学域保健学系)

2) Down 症候群のある人々の言語機能、嚥下・口腔機能、言語聴覚療法に関する調査結果

瀬戸口麗沙 (長崎医療センター 小児科)

3) 成人期ダウン症遺伝外来における循環器スクリーニング

福永啓文 (長崎記念病院)

4) ダウン症候群を持つ児者の睡眠時無呼吸関連症状の実態と健康関連 QOL の関連

黒田裕美 (長崎大学生命医科学域保健学系)

特別企画 「パタカラプラス」の概要とコンテンツ 近藤達郎 (みさかえの園むつみの家)

② 2024.02.24 Autism Caravans あちこちセミナー in 東京のご案内

「再考、強度行動障害支援への取り組み～実践、人材育成と地域支援体制を中心に～」

2024.2.24 (土) 10:00～15:00 明星大学 28号館 (東京都日野市程久保 2-1-1)

【内容】 【基調講演】「強度行動障害に関する研究と支援の歴史 (仮題)」

社福) 横浜やまびこの里 相談支援部 部長 志賀 利一 氏

【行政説明】「強度行動障害支援の政策について (仮題)」

厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 発達障害対策専門官 西尾 大輔 氏

【実践報告会 (分科会)】

第1分科会 「幼児期・学齢期を中心とした実践報告」

コーディネーター 諏訪 利明 氏 (川崎医療福祉大学 准教授)

第2分科会 「成人期を中心とした実践報告」

コーディネーター 中山 清司 氏 (自閉症 e サービス全国ネット代表)

第3分科会 「人材育成と地域支援体制による実践報告」

コーディネーター 縄岡 好晴 氏 (明星大学 准教授)

参加費 3000 円 (事前振込) 定員 250 名

締切 2月10日 (定員に達し次第、締め切り)

*当日は昼食持参・公共交通機関を利用のこと。



今回は、二つの研修会をご紹介させていただきました。年度末に伴い、学会や各学校等でも報告会等が多く開催されます。今年も、新しい情報を手に入れて、また子どもたちと向き合っていきたいと思えます。また、気になること等ございましたら、お気軽にご相談ください。お待ちしております。



【ちょっと休憩】 年未年始にかけて、母が帰って来ました。



お腹周りも一段とぽっちゃりしていて、2階に上がるのも一苦勞。中々体も動きにくいようです。寝室ではソファベッドで寝てもらったので、施設のベッドのように周りには手すりが無いため上手く下半身を動かすことができません。「もう、やんなっちゃうわね!」と苦笑いしながら、斜めのまま横たわる母。以前、福祉機器展でもらった、スライドシートを使いサポートすると、重たい身体もすぐに真っ直ぐになりました。

入浴の場面でも、「左足が上がらなくなった」と言いながら、時間はかかりつつも一人で何とかパジャマのズボンに足を通す姿があります。また、湯船の中でなら、一人で身体を洗うことができる部分が増えます。こちらの工夫次第ではできることもまだまだあるようでした。

今回母と一緒に過ごした中で、本人が努力しても上手くいかないことはたくさんありつつも、自分から積極的に行うこともありました。水引を使って、オリジナルの正月飾り作りを熱心に取り組んだり、一緒に掃除や洗濯、正月料理を手伝ったり、自分でやれるところは自分でする姿がありました。

学校で子どもたちの学習活動等の様子を見てみると、「ボトムアップの時代はもう終わったのかな...」と思うことがあります。年齢が若い場合では、色々な方法を試しながら学ぶ手段ややり易さを検討していきますが、だんだんと成長し年齢も高くなってくると、今ある力を使って、使いやすい道具ややり易い方法で物事を解決する(トップダウンの力で生活をする)ことに切り替える必要があります。いつまでも「頑張れ頑張れ」と言われても、誰しも能力の限界はあるのではないのでしょうか。

例えば、四則計算のプリント学習を頑張ってきたからこそ、今後はスマートフォンの電卓機能を使ってお金の計算をして買い物を経験する。ひらがなが読めるようになったので、書けるようになって欲しいと願うところですが、文字を書くには目で見て空間を正しく認識し、手先をコントロールする力が必要です。自筆にこだわらず、単語カードを選んだりタブレット端末やスマートフォン等を使って自分の気持ちを伝えるためコミュニケーションアプリを使い生活の質を高めていくことも可能です。

子どもたちの発達的なハンディキャップを改善する努力はしつつも、備わった力と知識を使い、色々な便利な道具等を使って技能を高め、自分らしく生きることができると良いと思っています。

さて、施設に戻る日に、「ごめんね、迷惑かけて」と話す母。「子どもに老いを教えることが親の役目なんだって」と答えると、少しはにかむ母でした。生き物は、子孫を残すと大抵の場合、親はすぐに死んでしまいます。しかし、子孫を残す使命が終わっても、人が長く生きることができ理由の一つは、「子育てに時間がかかるから」と言われています。母の老いを感じつつ、ひ孫のために毛糸のおくるみを頑張って編む母、私自身も春には双子のおばあちゃんです。

文責 橋爪

